

## フリーエネルギー実現回路2

(Dirac の置換えによる説明)

渡辺 満 (静岡県)

### §0 はじめに

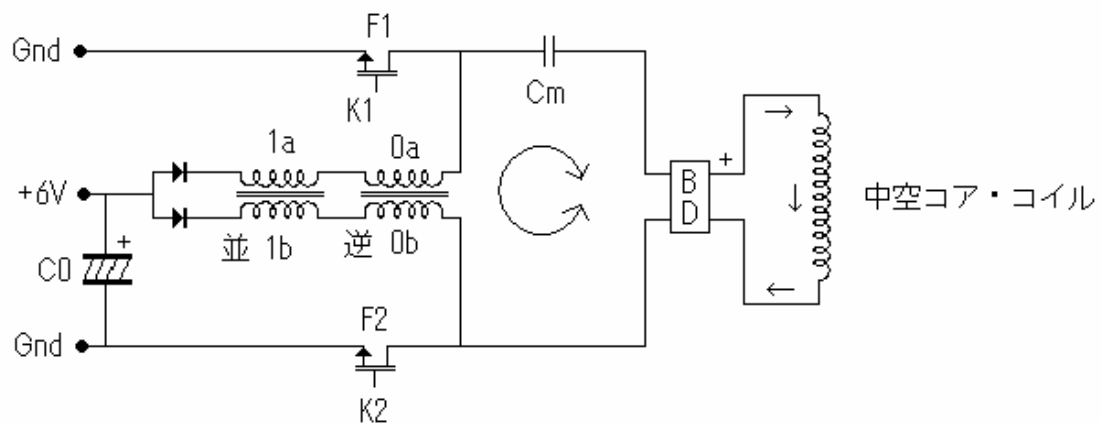
今やるべきことは、フリーエネルギーの基本的技術を確認し、一方で、その物理学的原理を、明らかにすることである。

今回は、アイ起電力の実像に迫るため、

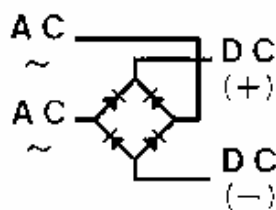
前回の回路に、ちょっとした細工をしてみた。

中空コア・コイルの直前に、ブリッジ・ダイオードを付け、

このコイルに流れる電流を、次図・右のように、一方向にした。



ブリッジ・ダイオード  
BD



通常の LC 共振では、こうしても大丈夫だろうと、思うのだけど、やってみると、何と、アイ起電力は発生しなくなった。

コンデンサ Cm の交流電圧は、がくと下がり、AC10V 強。

この状態では、このコイルは、ただの邪魔物だ。

この結果から、何が見えるだろうか？

こういう風に、見えないか。

すなわち、このコイルに、両方向に電流を流しているときは、コイルの背後にある、何かの物理的実体が、電流に同期して共振する。しかし、片方向にすると、その共振がうまく行かなくなる。その結果、アイ起電力も発生しなくなる。

例えば、電子回路の LC 共振でも、両方向に起電力を与えないと、片方向だけでは、うまく共振しない。

(コンデンサ C への充電が、片側に偏るからだ。)

この場合も同じだろう、片方向だけでは、背後にいる何か、共振したまらない。

では、その背後で共振する物理的実体とは、何か？

4 元電磁気学がよく知られた式を、思い出そう。

$$\frac{\partial^2 A^i}{\partial x^1 \partial x^1} + \frac{\partial^2 A^i}{\partial x^2 \partial x^2} + \frac{\partial^2 A^i}{\partial x^3 \partial x^3} - \frac{\partial^2 A^i}{\partial x^4 \partial x^4} = J^i \quad (i=1, 2, 3, 4)$$

ここで、左辺は電磁ポテンシャル、右辺は 4 元電流

この式は、電流によって現れる電磁ポテンシャル  $A_i$  を、表すものである。

これ以降、電磁ポテンシャルを‘電磁ポ’と簡単に表記する。

電流があれば、その付近には、この式に従って、必ず電磁ポが現れる。

すなわち、コイルの背後にあって共振する、何かの物理的実体とは、この電磁ポだろう。

(上記の式は、ローレンツ・ゲージを仮定している。

無条件にローレンツ・ゲージとしてよいのか、疑問は残るが、とりあえずこうしておく。)

## §1 「Dirac の置換え」による説明

電磁ポテンシャルが電子に影響を及ぼす現象として、よく知られたアハラノフ・ボーム効果(AB 効果)がある。

当初は、アイ起電力発生メカニズムを、このアハラノフ・ボーム効果によって、説明しようと試みたが、説得力のあるものに、ならなかった。

しかし、その過程で、「Dirac の置換え」というのを知った。

$$p \rightarrow p - qA$$

( $p$ :電子の運動量、 $-q$ :電子の電荷( $q > 0$ )、 $A$ :電磁ポテンシャル)

これを使えば、簡単に説得力のある説明ができそうだ。

一方で、なぜ、こんな置換えをしていいのか、わからないので、しばらく、その理由を考えた。

1週間後、まったく同じものが、時空理論からも出ること、突き止めた。

(よっしゃ！)

→ 時空理論/Dirac の置換え.pdf

異なる発想で作られた2つの理論から、まったく同じ、ピッタリと一致する結果が出る。

そんなことは、偶然には起きないことだろう。

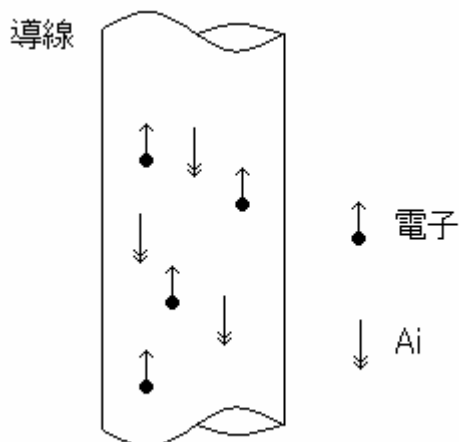
これは、両者とも正しいということだろう。

そこで、自信を持って、この「Dirac の置換え」を使うことにした。

● 導線に電流が流れると、導線の中には、自由電子の流れができる。

同時に、電流と同方向に電磁ポテンシャル  $A_i$  が作られる。

電流の自由電子は、この  $A_i$  の場の中に、置かれることになる。



電子が負電荷のため、電流と電子の方向は逆である。

コイルの場合には、隣接する導線の電流による  $A_i$  も、これに加わる。  
 (さらに、コアが入っている場合には、コア内の磁化電流による  $A_i$  も、  
 加わるかも知れない。)

さて、Dirac の置換えによって、電子の運動量は新たに、 $p-qA$  となるが、  
 図からもわかるように、 $p$  と  $-qA$  は同方向になる。

すなわち、 $A_i$  によって、電子の運動量は増大する。

(電流によって作られる電磁ポテンシャル  $A_i$  の方向や大きさは、  
 §0で紹介した  $A_i$  の方程式を解くことによって、知ることができる。  
 例えば、「砂川重信著:電磁気学」等に、その解が載っている。)

● 電子の運動量の増大は、電流の増大となるだろう。  
 ここに、とんでもない現象が見えてくる、次の連鎖である。

電流増大 →  $A_i$  増大 → 電流増大

この連鎖によって、電流は、どんどん大きくなるに違いない。  
 これは、電磁気学の体系外の出来事であるから、  
 電磁気の体系内でエネルギーが保存されるならば、これは、保存則外になる。

## §2 ウロボロス

巻き数の多いコイルに、強いパルス状の電流を入力すると、電磁誘導とは別の起電力が、順方向(電流と同じ方向)に生じる。僕は、これを、電磁ポテンシャル(Ai)によるものと考え、アイ起電力と呼んだ。今回、アイ起電力のメカニズムを探るため、「Dirac の置換え」を持ってきた。これでどうやら、うまく説明できたように思える。

このとんでもない増大連鎖、これを‘ウロボロス’と呼ぼう。  
2つの要素が、互いに相手を強める、ウロボロス。  
[電流増大⇔電磁ポ増大] ウロボロス  
アイ起電力という、著しく顕著な現象は、ここからくるのだろう。

何年前、テレビで「ウロボロス」というドラマをやっていた。確か、広末涼子が先生役をやっていた、復讐の物語である。そのとき、その図を見て、これは考え方として使えるな、と思った。



ウロボロス

フリーエネルギー装置「ウロボロス」を、作れ！  
地球を救え！ 歴史に名を残せ！ 広報しろ！

### ●放電に伴う負性抵抗

放電現象には、負性抵抗が伴うという話がある。  
上に述べた、「Dirac の置換え」効果は、別にコイルでなくても、単独の放電であっても、成り立つに違いない。  
すなわち、放電の負性抵抗は、このアイ起電力の可能性もある。

放電では、コイルの場合に比べて、パルスが圧倒的に強いので、例えば、背後に共振はなくても、よいのだろう。  
これによって、落雷の、あの物凄いエネルギーも、理解できるというものだ。

●これによって、テスラ・コイルの謎も解けた。

テスラ・コイル現象(アイ起電力)は、高電圧でなくても、わずか DC6V 電源でも、起こすことができるのだ。

次の目標は、フリーエネルギー発電を実用化することだが、そこまでは、僕一人には、荷が重過ぎる。僕は、小さな部屋の片隅で、小さな装置を並べて、小さな実験を繰り返すだけだ。

% ウロボロスという名前は、いつ頃からあるのだろうか？  
アリストテレス、ソクラテス、アルキメデス、ピタゴラス、アキレス。  
これらはすべて、‘ス’で終わっていて、似ている。  
‘カドケウス’というものもある。  
ウロボロスには、‘永遠と再生’という意味があるらしい。  
フリーエネルギーには、ピッタリだ。  
(るるる)

---

2017 年 12 月発行 V2

著者:渡辺 満, 発行者:渡辺 満

Copyright 渡辺 満 2017 年